

稲作

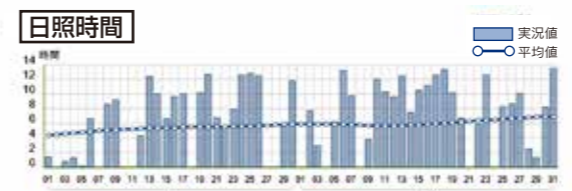
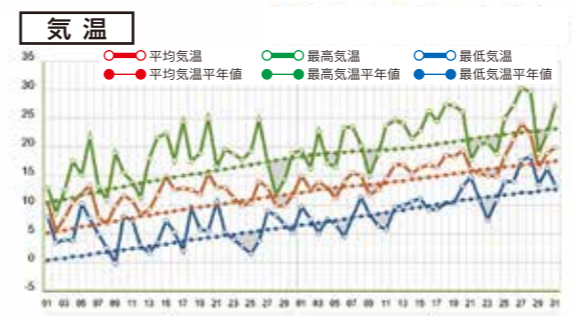
本田管理スタート 異常気象に備えよう

生育概況

今年の育苗は、浸種・催芽時の水温管理が徹底されたほか、気温が平年より高く推移したため、極端な出芽ムラ等はなく、苗の生育も数日前進しました。ただ、寒暖差が大きく、育苗ハウスの開閉が不十分であったところでは、高温障害(苗焼け)がみられました。育苗期後半にムシ苗や苗立枯病、もみ枯細菌病の一部が発生しました。

耕起作業は、4月上旬に降雨があり、前年のコンバインのわだち水が溜まり耕起に難儀したほか、4月中旬からは晴れの日が多かったことで、ほ場の乾燥が進み、耕起作業は平年より2日程度早まりました。田植作業は5月23日に盛期(50%)を迎えました(平年比マイナス1日)。5月20日までは好天となったため、活着が早く始まり良い初期生育が期待できますが、21日以降は降雨の日があり、田植え期間の前後半で生育差が出ています。向こう3か月予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並と予報されています。稲の観察をこまめにし、適期作業をお願いします。

令和8年気象経過(4月~5月大曲アメダス)



今月の栽培技術留意点

水管理で異常還元対策

有機物分解の過程で土中が酸欠状態になると根痛みの原因となる硫化水素などのガスが発生し稲の生育に影響を及ぼします。堆肥など有機物を多く投入しているほ場を中心に、飽水管理や水の入れ替え、一時的な田面露出など、土を酸化状態にする水管理を行い影響を軽減させましょう。

適期中干しと溝切り

中干しは有効茎決定期の目標茎数を確保できていれば直ちに行いましょう。中干し開始時期が遅くなると、その後の管理、生育に影響がでてしまいます。遅くとも6月末までには始めてください。茎数確保が遅くなりそうな場合は、先に溝切りを実施しておく、その後の水管理が楽になります。

雑草対策

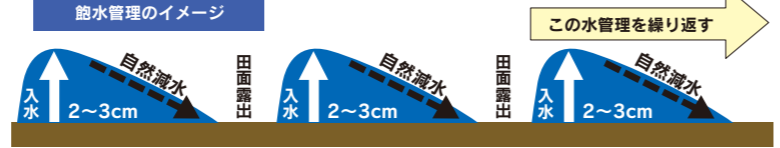
春先から気温が高く推移しているため、雑草の生育も早まっています。取りこぼし雑草がないか、ほ場内をよく確認して早めの対策を取りましょう。斑点米カメムシ類の繁殖地となる農道畦畔・休耕田の除草もこまめに実施し、発生密度を下げましょう。

夏に備える

長期予報では気温が高く推移すると予報されています。夏には高い確率でエルニーニョ現象となるとも言われています。近年はエルニーニョ現象でも、異常高温となることがあります(令和5年)。高温による影響は、生育ステージの前進や高温登熟のほか、雑草や害虫の発生があります。暑くなることを前提に稲の生育管理をしてください。省力化の時代ですが、稲の観察を忘れず。

異常還元は「飽水管理」で抑える

通常、中干しまでは常時浅水状態を保つようにしてきましたが、異常還元によるものとみられる生育停滞を防ぐため「飽水管理」に切り替えてください。「飽水管理」は、土壌の湿潤状態を保つ水管理で、土中の酸化状態(酸素が十分にあり)を保ち、ガス抜きも実施でき、異常還元の影響を抑えることができます。また、高温時には、気化熱により地温上昇を防ぐことができ、根の活力維持が期待できるので、温暖化気候に対応した水管理といえます。また、異常還元を抑えることでメタンガスの排出も抑制できるため、地球温暖化対策にもなります。



適期中干し実施を

近年は中干し開始時期が遅くなっています。中干しが後ろにずれると田面を十分に乾かせないほか、幼穂形成期と重なりと収量に影響が出かねません。中干しは条間・株間が見えなくなつてからするのでなく、左図を目処に行いましょう。落水後も分げつは発生します。梅雨時期と重なりますので、余裕をもって深水管理、中干しを行いましょ。

温暖化で生育早まる！
中干し・溝切り適期も早まっている
6月下旬に開始、7月中旬に終了

- 中干し要点
中干し期間は7~10日程度
幼形期までには終える
田面亀裂1~2cm
強い中干しはNG

飽水管理のポイント

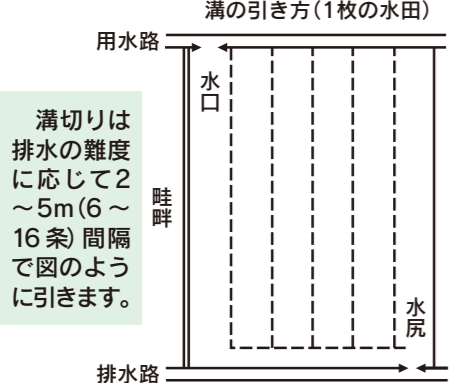
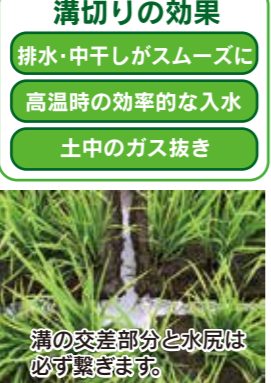
- 土壤を湿潤状態に保ち、異常還元を回避しながら、土中に酸素を供給させる。
常時湛水ではなく、一時的に田面を露出させる。
除草剤等散布時は、止め水期間を守ってください。
田面にヒビが入るほどは乾かしすぎない。
出穂前後は大量の水が必要になるため、3cm程度の湛水管理。
登熟期間も飽水管理とする。
田面が柔らかくなりすぎないように注意。

今年のは、気温が高いほか、前年のひこばえやワラ、春先の下草など、異常還元発生の材料と環境が整っています。なか稲の元気がないなあと感じ、ほ場に足を入れた時に泡がブクブクと出ているようなら、飽水管理が、水の入れ替えをしてください。除草剤散布期間を除いて、定期的に土中へ酸素を供給しましょう。

Table with 3 columns: 目標茎数以上, 目標茎数確保, 目標茎数未滿. Rows show planting density and target stem counts per m².

溝切りの実施

効率的な水管理ができる「溝切り」は高温下での稲作の必須技術です。溝切りは、中干し開始2日後頃の田面がやや軟らかい状態で行います。溝の交差点と水尻は忘れず、溝の交差点は少く、乗用型溝切り機は少く、水が張った状態で行うと作業効率が上がります。ほ場整備初年度や排水不良田、高低差があるほ場、水不足の懸念があるほ場では必ず溝切りを行ってください。溝切りは排水向上だけでなく、登熟期にかけて必要となる道筋です。



倒伏軽減の一点観察

6月25日頃の有効茎決定期と7月5日頃の最高分けつ期の草丈を比べてみて、15センチ以内の伸長であれば、15センチ以内の倒伏安全圏です。事前に観察する株を設定しておく、倒伏軽減剤の使用の検討をします。倒伏軽減剤は散布適期のうち早めの散布で効果が安定します。



倒伏軽減剤の散布適期
ロミカ粒剤 出穂25~10日前
スマレクト粒剤 出穂20~7日前
ビビフルフロアブル 出穂10~2日前
倒伏軽減剤はムラ無く全面に、早めの散布を



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。



雑草が多い
 雑草が多い
 雑草が多い
 雑草が多い
 雑草が多い

中後期除草と 斑点米カメムシ類対策

初動が大切
 いもち病を見つけたら速やかに 予防剤と治療剤の混合剤の茎葉散 布を行います。併せて、指導機関や J Aへご相談ください。

ほ場内の密に注意を
 田植え時に苗が重なって密植に なっている箇所や、肥料が重なり葉 色が濃密になっている箇所など、 密な場所を中心に、いもち病は発 生しやすくなります。また、いもち 病無防除ほ場の隣接ほ場も合わせ て、定期的に病斑が発生していない か様子を確認してください。

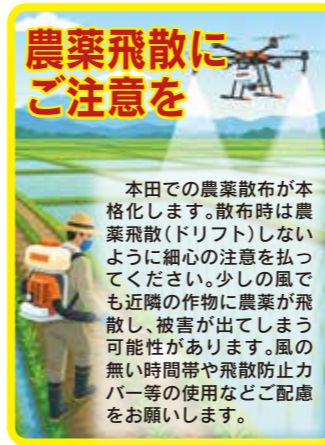
余り苗は速やかに処分を
 補植用余り苗は、育苗期防除や箱 処理剤を処理していたとしてもほ 場にあるだけでいもち病の伝染源 となります。補植作業が終わった ら、速やかに土中に埋没するなど確 実に処分をしてください。

葉いもち防除は予防が鉄則
 近年、箱処理剤の普及によってい ちもち病の発生は少なくなつてきて いますが、いもち病は一度発生する と広範囲に感染が広がり、食い止め るのが難しい病気です。油断せず に、昨年発生した地区や、毎年発生 しやすい地区・ほ場を中心に早期発 見早期防除に努めましょう。

どんな品種もいもち防除を
 管内でも様々な品種の導入が進 んでいますが、WCSや飼料用米、 業務用米など、品種や用途を問わず のほ場でも、育苗期防除、箱処理 剤、本田防除など、基本的な防除は 必ず実施してください。

薬剤名	ノビエ	ホタルイ	オモダカ	コナギ	散布方法	成分数
トドメMF	5~7葉期まで (剤型による)	効果なし	効果なし	効果なし	湛水散布 (剤型による)	1
クリンチャー	4~6葉期 (剤型による)	効果なし	効果なし	効果なし	湛水散布 (剤型による)	1
ヒエクリーン	4葉期まで	効果なし	効果なし	効果なし	湛水散布	1
バサグラン	効果なし	増殖中期まで	発生揃期まで	○	落水または 極浅く湛水	1
ヒエクリーンバサグラン	4葉期まで	4葉期まで	矢尻葉抽出期まで	○	極浅く湛水	2
クリンチャーパス	5葉期まで	増殖中期まで	発生盛期まで	○	落水または 極浅く湛水	2
レプラス	4葉期まで	花茎10cmまで	矢尻葉3葉期まで	6葉期まで	湛水散布	4
ツイゲキ	4葉期まで	草丈20cmまで	矢尻葉4葉期まで	6葉期まで	湛水散布	3
バイスコープ	効果なし	草丈15cmまで	矢尻葉5葉期まで	3葉期まで	湛水散布	2

※剤型によって使用時期、散布方法が異なる場合があるので、必ずラベルを確認してください。



箱処理剤や側条施用剤を使用していない場合	
薬剤名	オリゼメート粒剤
散布時期	6月15日頃(6/12~6/18)
散布量	2~3kg/10a
※オリゼメート粒剤は稲の生育量ではなく、時期で散布します。	
緊急対策時(例)	
薬剤名	ブラシン(粉、フロアブル)
散布時期	発生確認時
散布量	粉剤 D L : 3~4kg/10a フロアブル : 1,000倍 60~150ℓ/10a : 8倍 0.8ℓ/10a(無人航空機)

いもち病を見つけたら速やかに 予防剤と治療剤の混合剤の茎葉散 布を行います。併せて、指導機関や J Aへご相談ください。



大豆情報
 排水対策
 大豆は湿害に弱い作物です。排水 対策の有無で生育や収量に大きく 差が出ますので、必ず排水対策を実 施してください。

播種時期	播種量 (kg/10a)
6月中旬	5.3~6.6
6月下旬	7.5~10



ケイ酸は幼穂 形成期から吸収 されていきます ので事前に散布 をしてください。 ケイ酸を十分に 吸収した稲は、 異常気象下でも 呼吸・蒸散機能が 維持され気化熱 により葉面温度 の上昇を防ぐこ とができます。さ らに、粉殻の結合 を強くし割れ粉 を防ぐことで斑 点米カメムシ類 による被害を軽 減してくれます。 倒伏軽減の効果 もあることから、 ケイ酸を継続的 に投入している 地域では高温で も品質を維持し ています。温暖 化気候での稲作 にはケイ酸が欠 かせない必須成 分です。

肥料名	種類	施肥量	施肥時期	施用効果
けい酸加里	ケイ酸 含有肥料	20~40kg/10a	幼穂形成期 まで	①倒伏抵抗性が高まる、②根の活力向上、③有効茎歩合 向上、④登熟歩合向上、⑤食味向上、⑥病害虫被害の軽減、 ⑦葉身の老化軽減、⑧ワキの発生抑制
シリカ未来		1.4kg(1本)/10a(流し込み)		
KSK28	リン酸 含有肥料	20kg/10a	9葉期 まで	異常還元等により、分けつが遅れている稲に使用。 ①根の活力向上、②有効茎歩合向上、③登熟歩合向上
PK40号				
マグコープ				

まだ間に合うケイ酸補給

種子消毒の順番

- ①クルーザーMAXX**
 種子10kgに対し、薬液80ml塗布。 1瓶240mlで種子30kg分です。
- ②まめぞう**
 転作初年度は根粒菌接種効果大。 種子10kgに対し80g塗布。
- ③ネバルくん**
 発芽揃い向上、生育初期の発根促 進、毛細根増加。種子10kgに対し 100g塗布。

病害虫対策
 種子伝染性病害の発生を予防す るため、種子更新は必ず行いましょ う。紫斑病の種子消毒には、クルー ザーMAXXを使用します。同剤は 鳥害に対する忌避効果があるほか、 初期病害虫(茎疫病、黒根腐病、タネ バエ、ネキリムシ類、ラタスジヒメ ハムシ、アブラムシ類)の同時防除 が可能です。定量使用で効果が安定 します。

幼穂形成期(7月15日頃)の生育診断(あきたこまち)

生育・栄養診断の実施(あきたこまち) 【時期別理想生育量】

項目	時期	最高分けつ期	幼穂形成期	減数分裂期
草丈 (cm)	上限	50	64	75
	理想	47	62	74
葉数 (本/m ²)	上限	484	484	454
	理想	462	463	437
葉緑素 計値 (SPAD)	上限	44.0	44.3	42.0
	理想	9.8	10.9	12.3
葉緑素 計値 (SPAD)	上限	45	43	39
	理想	44	42	38
葉緑素 計値 (SPAD)	上限	43	41	37
	理想	43	41	37

生育診断と穂肥
 米の低たんパク化を進めるあま り、施肥チッソ量を減らしすぎて稲 体が栄養不足になっていては、高温 登熟を乗り切ることができません。 高温登熟を見越した養分補給が必 要です。

生育診断と穂肥
 一発型肥料は気温が高いほど チッソが早く溶出しやすいため、高 温の場合肥料切れとなつた事例が あります。一発型肥料を使用してい ても幼穂形成期に生育・栄養診断を 行い、残存肥料予測や気象予報に 応じた穂肥の検討をしてください。

穂肥肥料	施肥量	施肥時期	備考
穂肥555	現物 7 kg(N:1.05kg)	出穂前	硫安系 15-5-15
穂肥V545	現物 10kg(N:1.5kg)	15日頃	塩安系 15-4-15